

たんの小史 ふるさと端野

29

端野の教育 (その3)

草創期の小学校は、屯田中隊ごとに一校を設立し始めました。

しかし、その通学区域は広く通学する子どもたちにとっては、たいへん難儀なことでした。

端野尋常小学校創立当時は、道路といっても木を切ったり、草を刈っただけで、小川は丸太を二、三本並べた上を渡り、服装は、和服に下駄、冬はモンペをつけ、つまごを履き、綿入れの半纏が外套代わりで、教科書は風呂敷に包んで背負い、麦にいなきびの入った握り飯の弁当を腰に下げ通学したと、語り継がれています。

教授場の設置

明治三十六（一九〇三）年、屯田兵の現役解除（屯田兵村は、六年を以て解除することになっていました）に伴い、明治末期から大正初期にかけ、川向、協和、忠志、豊実、北登地区に相次いで農場が設置され、さらに、大正元（一九一二年）年、網走本線（池田〜網走間の鉄道）が開通し、緋牛内地区も含め入植者が急増しました。

しかし、これらの地区から端野尋常高等小学校に通学するには、相当の困難と危険があり、各地から分校（教授場）の設置の要望が野付牛役場に寄せられました。

端野地区における教授場や尋常小学校の拡充は、明治四十三（一九一〇）年から始まりました。

その変遷は次のとおりです。（戦後の学生改革まで）

小学校の移り変わり

端野尋常高等小学校（明43）附属緋牛内教授場を（大5）緋牛内に移転区に設置

（大9）緋牛内尋常小学校
（昭3）緋牛内尋常高等小学校

（明43）附属下仁頃教授場（現北見市）

（大4）下仁頃尋常高等小学校

（大5）附属登位加教授場

（昭13）登位加尋常小学校
（昭13）字名改正により北登尋常小学校

（昭17）高等科併置
（大13）附属貴登多牛教授場

（昭7）貴多尋常小学校
（昭13）字名改正により北美尋常小学校

（大5）附属少牛教授場

（大6）少牛尋常小学校
（昭13）字名変更により忠志尋常小学校

（大5）附属一區分教場

（昭2）附属川向第一教授場

（大5）附属川向教授場（現北見西小学校）

（大8）全焼本校に収容
（昭21）再開
（昭11）協和尋常小学校
（大6）川向尋常小学校
（昭16）高等科併置

「当時の思い出」から

昭和五十一年（一九七六）年四月、川向、協和、豊実、北登小学校と端野小学校が統合し、新しい校舎（現在の新校舎の前の校舎）ができ、新端野小学校として新たに歩み始めました。

この統合に際し、端野小学校の記念誌「七八年のあゆみ」が発行されましたが、この中から草創期に端野尋常高等小学校を卒業された方々の「当時の思い出」から、転載し当時を偲んでみたいと思います。

西川 政吉 氏

（二区、大正三年尋卒、同五年高等科卒）

思い出

新入学は明治四十一年四月一日で、その当時の校長は永田亮助先生でした。

明治三十一年より大正八年までの二二年間、屯田時代の旧校舎増築が二回あったように聞いています。教室は七室、職員室、運動場、子供室、宿直室二室に便所二カ所、どれも頭の中に走馬灯のように思い出し、懐かしい気持ちで一杯です。

今回新しい校舎と比較すると雲泥の差、お粗末な校舎でした。窓ガラスは半紙判九枚入り、吹雪になれば廊下に雪が入り暖房も薪ストーブ、板作りの校舎でよくも寒さに耐えしのんできたものと、自分ながら関心する次第です。

服装も、モンペ履いてネルの三角巾をかぶり、木綿の手かえしをし、爪甲に赤毛布を巻いて通学したものでした。

大正二年の秋の頃と思いますが、札幌師範学校校長小山先生によって、網走支庁管内尋常高等小学校の数校を対象に六年生の実力調査が実施され、その結果本校が第1位の成績を上げ、梶谷校長（屯田第一

裏面に続く

中隊三区屯田兵の家族で、北海道視学を経て、昭和四年から十四年まで端野村村長）や担任の門田先生が大変喜ばれ、我々生徒も大変嬉しかった。

また、農業を主体とした端野なので、農業教育に熱心な先生が、当時校舎裏の荒廃地を高等科の生徒全員で一畝一畝開墾に精を出し、立派な畑を造成、馬鈴薯を耕作し収穫した芋の試食会を催し、将来村の農業発展に頑張ろうと、気炎をあげた思い出も懐かしい限りです。（抜粋）

石川 正雄 氏

（三区、大正四年尋卒、同六年高等科卒）

私の小学校二、三年生時代

明治四十二年四月一日端野尋常小学校に入学。当時私の家は現在の端野町川向南四線と八号と九号間にあった。ここから学校までの里程は約四キロメートルで、原野の中の細道を通り、常呂川沿いに一二号まで柳や雑木とブドウ蔓の覆いかぶる中をめぐり、渡し舟（当時、常呂川には東一七号線付近と兵村一区にしか橋はなく、東一二号線付近と東一七号線付近、忠志地区に小型の舟で常呂川を渡る渡舟場がありました）で川を渡って、屯田開拓の人びとの働いておられる姿を見て学校に通ったものです。履物は、柳の木の手造りの下駄であるが、暖くなる六月頃から霜の降るころまでは、家を出て三〇メートルも過ぎると下駄は草むらに投げ込んで素足で通った。学校の外井戸には大きな足洗い場があり、ここで洗って教室や運動場に入ったものだ。

常呂川の橋といえば、国道三九号の東一七号線あたりに豊穰橋ただ一つ、洪水の時などは渡し舟は流され、この橋を渡るよりほかはなく、里程は十キロメートルにもなり容易ではないが、日ごろ鍛えた素足で藪・芽の中を協和の入口から加藤牧場、二中隊一区小泉を通り長谷川牧場、さらに、嶺牧場を通っての道のりを通った。

帰る途中暗くなり、桜井マサエさん（同級生）のところから提灯を借りてくることもあった。こうした時は、必ずと言ってよいくらい父か母が迎えに来てくれた。



▲端野尋常高等小学校大正3年度尋常科卒業記念

撮影月日は不明であるが、雪がないところをみると、大正3年11月ごろと推定される。この服装は当時最高の晴れ着で紋付を着た児童もいる。男子は丸坊主、女子はすべていちようがえし、女の先生は束髪（通称ハイカラ髪）であった。男の先生はそのころ洋服（詰襟）を着ていた。なお、児童は平常の場合はモンペか前掛けすがたであった。

卒業生の集い

卒業して学校に集まる事はほとんどなかった。せめて農閑期だけでも夜学のための集いをするように先生から話しかけられた。同志の者十数人が十二月から四月、までの農閑期に夜学に通ったのである。

先生は石原傳平先生、藤本梅吉先生で、算数、幾何、算盤、漢文などであった。この夜学に集う者で会を作ろうということになり、他にも呼びかけ四十人ばかりになり藤本先生の発案で習いを温めるということから「温習会」とし、毎月一日、

一五日に学校に集まり、お互いに話し合い、先生の話も聞いたのである。

この集いが発展し、大正十二（一九二三）年に端野尋常高等小学校同窓会が結成されました。

初代会長は、石川正雄氏と同級生で当時、端野尋常高等小学校の教師で、後に昭和三九年から五一年まで端野町長であった中澤廣氏でした。